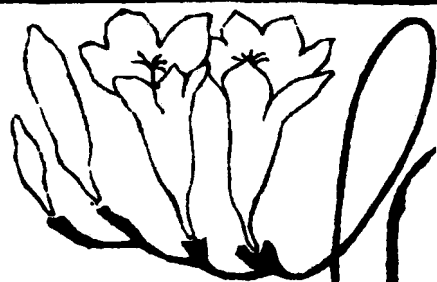




西園八猫怪下編





百
蘭
八
貓
尾

下
編

雙
回
燕
尾
箭



新選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年10月10日 印刷
昭和55年10月20日 発行
(第20刷)



夏目漱石著

吾輩ハ猫デアル (下編)

大倉書店・服部書店版

刊 行	財団法人 日本近代文学館 東京都目黒区駒場4-3-55 代表者 小田切進
編 集	名著複刻全集編集委員会 代表者 稲垣達郎
総発売元	株式会社 ほるぶ 東京都新宿区新宿2-19-13 代表者 中森薛人
製 作	株式会社 ほるぶ出版 東京連合印刷株式会社

このページ(表・裏)は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

序

「猫」の下巻を活字に植ゑて見たら頁が足りないから、もう少し書き足してくれと云ふ。書肆は「猫」を以て伸縮自在と心得て居るらしい。いくら猫でも一旦か襲へ落ちて往生した以上は、さう安つぽく復活が出来る譯のものではない。頁が足らんからと云ふて、おいそれと襲から這ひ上る様では猫の沽券にも關はる事だから是丈は御免蒙ることに致した。

「猫」と襲へ落ちる時分は、漱石先生は、巻中の主人公苦沙彌先生と同じく教師であつた。襲へ落ちてから何ヶ月の經つたか大往生を遂げた猫は固より知る筈がない。然し此序をかく今日の漱石先生は既に教師ではなくな

つた。主人苦沙彌先生も今頃は休職か、免職になつたかも知れぬ。世の中は猫の目玉の様にぐるぐ廻轉してゐる。僅か數ヶ月のうちに往生するものも出来る。月給を棒に振るものも出来る。暮も過ぎ正月も過ぎ、花も散つて、また若葉の時節となつた。是からどの位廻轉するかわからない、只長へに變らぬものは甕の中の猫の中の眼玉の中の瞳だけである。

明治四十年五月

漱
石



(第十)

夏目漱石

「あなた、もう七時ですよ」と襖越しに細君が聲を掛けた。主人は眼がさめて居るのだから、寐て居るのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのは此男の癖である。是非何とか口を切らなければならぬ時は、うんと云ふ。此うんも容易では出てこない。人間も返事がうるさくなる位無精になると、どこことなく趣があるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あまり珍重して居らん様だから、其他は推して知るべしと云つても大した間違はなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の

傾城に可愛がられやう筈がない、とある以上は、細君にさへ持てない主人が、世間一般の淑女に氣に入る筈がない。何も異性間に不人望な主人を此際にとさらに暴露する必要もないのだが、本人に於て存外な考へ違をして、全く年廻りのせゐて細君に好かれないのだ。杯と理窟をつけて居ると、迷の種であるから、自覺の一助にもならうかとの親切心から一寸申し添える迄である。

言ひつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方が其注意を無にする以上は、向をむいてうんさへ發せざる以上は、其曲は夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませんよと云ふ姿勢で箒とはたき、を擔いで書齋の方へ行つてしまつた。やがてばた／＼書齋中を叩き散らす音がするのは例によつて例の如き掃除を始めたのである。一體掃除の目的は運動の爲か、遊戲の爲か、掃除の役目を帯びぬ吾輩の關知する所でないから、知らん顔をして居れば差し支ないものゝ、この細君の掃除の如きに

至つては頗る無意義のものと云はざるを得ない。何が無意義であるとか云ふと、此細君は單に掃除の爲めに掃除をして居るからである。はたさを一通り障子へかけて、箒を一應疊の上へ滑らせる。夫て掃除は完成した者と解釋して居る。掃除の原因及び結果に至つては微塵の責任だに背負つて居らん。かるが故に綺麗な所は毎日綺麗だが、ごみのある所、ほこりの積つて居る所はいつてもごみが溜つてほこりが積つて居る。告朔の餼羊と云ふ故事もある事だから、是でもやらんよりはましかも知れない。然しやつても別段主人の爲にはならない。ならない所を毎日／＼御苦勞にもやる所が細君のえらい所である。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくつて頑として結びつけられて居るにもかゝらず、掃除の實に至つては、妻君が未だ生れざる以前の如く、はたきと箒が發明せられざる昔の如く、毫も擧つて居らん。思ふに此兩者の關係は形式論理學の命題に於ける名辭の如く、其内容の如何にかゝはらず結合せられたものであらう。

吾輩は主人と違つて、元來が早起の方だから、此時既に空腹になつて參つた。到底うちのものではへ膳に向はぬさきから、猫の身分を以て朝めしに有りつける譯のものではないが、そこが猫の淺ましさと、もしや烟の立つた汁の香が鮑貝の中から、うまさうに立ち上つて居りはすまいかと思ふと、じつとして居られなくなつた。はかない事を、果敢ないと知りながら頼みにするときは、只其頼み丈を頭の中に描いて、動かずに落ち付いて居る方が得策であるが、さてさうは行かぬ者で、心の願と實際が、合ふか合はぬかは是非共試験して見たくなる。試験して見れば必ず失望するにきまつてゐる事で、最後の失望を自ら事實の上に受取る迄は承知出来んものである。吾輩は堪らなくなつて臺所へ這出した。先づへつ、いいの影にある鮑貝の中を覗いて見ると案に違はず、夕べ舐め盡した儘、間然として、怪しき光が引窓を洩る。初秋の日影にかゝやいて居る。御三は既に炊き立の飯を、御櫃に移して、今や七輪にかけた鍋の中をかきまぜつゝある。釜の周圍には沸き上がつて流れだした米

の汁が、かさ／＼に幾條となくこびり付いて、あるものは吉野紙を貼りつけた如くに見える。もう飯も汁も出来て居るのだから食はせてもよさうなものだと思つた。こんな時に遠慮するのは詰らない話だ、よしんば自分の望通りにならなくつたつて元々て損は行かないのだから、思ひ切つて朝飯の催促をしてやらう、いくら居候の身分だつてひもじいに變りはない。と考へ定めた吾輩はにやあ／＼と甘へる如く訴ふるが如く、或は又怨ずるが如く泣いて見た。御三は一向顧みる景色がない。生れ付いての御多角だから人情に疎いのはとうから承知の上だが、そこをうまく泣き立てゝ同情を起させるのが、こつちの手際である。今度にはやご／＼とやつて見た。其泣き聲は吾ながら悲壯の音を帯びて天涯の遊子をして斷腸の思あらしむるに足ると信ずる。御三は恬として顧みない。此女は聾なのかも知れない。聾では下女が勤まる譯がないが、ことによると猫の聲丈には聾なのだらう。世の中には色盲といふのがあつて、當人は完全な視力を具へて居る積でも、醫者から云は

せると片輪ださうだが、此御三は聲盲なのだらう。聲盲だつて片輪に違ない。片輪のくせにいやに横風なものだ。夜中などでも、いくら此方が用があるから開けてくれろと云つても決して開けてくれた事がない。たまに出してくれたと思ふと今度はどうしても入れて呉れない。夏だつて夜露は毒だ。況んや霜に於てをやで、軒下に立ち明かして日の出を待つのは、どんなに辛いか。到底想像が出来るものではない。此間しめ出しを食つた時などは野良犬の襲撃を蒙つて、既に危うく見えた所を、漸くの事で物置の家根へかけ上つて、終夜顛へつゞけた事さへある。是等は皆御三の不人情から胚胎した不都合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつて、感應のある筈はないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに戀のふみと云ふ位だから、大抵の事ならやる氣になる。にやごをう／＼と三度目には、注意を喚起する爲めにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではベトエンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音と確信して居るのだが、御三には何等の影響も

生じない様だ。御三は突然膝をついて、揚ゲ板を一枚はね除けて、中から堅炭の四寸許り長いのを一本つかみ出した。それから其長い奴を七輪の角でぼんぼんと敲いたら、長いのが三つ程に碎けて近所は炭の粉で眞黒くなつた。少々は汁の中へも這入つたらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。到底吾輩のシンフォニーには耳を傾けさうにもない。仕方がないから悄然と茶の間の方へ引きかへさうとして風呂場の横を通り過ぎると、こゝは今女の子が三人で顔を洗つてゐる最中で、なか／＼繁昌して居る。

顔を洗ふと云つた所で、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻についてさへ行かれない位小さいのだから、正式に顔が洗へて器用に御化粧が出来る筈がない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雑巾を引きずり出して頻りに顔中撫て廻はして居る。雑巾で顔を洗ふのは定めし心持ちがわるからうけれども、地震がゆるる度にも、ちろい、わと云ふ子だから此位の事は

あつても驚ろくに足らん。ことによると八木獨仙君より悟つて居るかも知れない。さすがに長女は長女丈に、姉を以て自ら任じて居るから、うがい茶碗をから／＼かんと拋出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾をとりにかゝる。坊やちゃんも中々自信家だから容易に姉の云ふ事なんか聞きさうにもない。「いや、よ、ばぶ」と云ひながら雑巾を引つ張り返した。此ばぶなる語は如何なる意義で、如何なる語源を有して居るか、誰も知つてゐるものがない。只此坊やちゃんが癪癢を起した時に折々御使用になる許りだ。雑巾は此時姉の手と坊やちゃんの手で左右に引つ張られるから、水を含んだ眞中からぼたぼた雫が垂れて容赦なく坊やの足にかゝる、足丈なら我慢するが膝のあたりがしたゝか濡れる。坊やは是でも元祿を着て居るのである。元祿とは何の事だとだん／＼聞いて見ると中形の模様なら何でも元祿ださうだ。一體だれに教はつて來たものか分らない。坊やちゃん、元祿が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落れた事を云ふ。其癖此姉はつい此間迄元祿と双六とを問

違へて居た物識りである。

元祿で思ひ出したから序に喋舌つて仕舞ふが、この子供の言葉ちがひをやる事は夥しいもので、折々人を馬鹿にした様な間違を云つてゐる。火事で茸が飛んで來たり、御茶の味噌の女學校へ行つたり、惠比壽臺所と並べたり、或る時杯は「わたしや薬店の子じやないわ」と云ふから、よく／＼聞き糺して見ると裏店と薬店を混同して居たりする。主人はこんな間違を聞く度に笑つて居るが、自分が學校へ出て英語を教へる時杯は、是よりも滑稽な誤謬を眞面目になつて、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——當人は坊やとは云はない、いつでも坊ばと云ふ——元祿が濡れたのを見て「元どこがべたい」と云つて泣き出した。元祿が冷たくては大變だから、御三が臺所から飛び出して來て、雑巾を取上げて着物を拭いてやる。此騒動中比較的靜かであつたのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向ふむきになつて棚の上から轉がり落ちた、御白粉の瓶をあけて、しきりに御化

粧を施して居る。第一に突つ込んだ指を以て鼻の頭をキューと撫でたから、豎に一本白い筋が通つて、鼻のありかゝ聊か分明になつて來た。次に塗りつけた指を轉じて頬の上を摩擦したから、そこへもつてきて、是亦白いかたまりが出來上つた。是丈裝飾が整つた所へ、下女が這入つて來て坊ばの着物を拭いた序に、すん子の顔もふいて仕舞つた。すん子は少々不滿の體に見えた。

吾輩は此光景を横に見て、茶の間から主人の寢室迄來てもう起きたかと、ひそかに様子をうかがつて見ると、主人の頭がどこにも見えない。其代り十文半の甲の高い足が、夜具の裾から一本食み出して居る。頭が出て居て起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのであらう。龜の子の様な男である。所へ書齋の掃除をしてしまつた妻君が又箒とは、たきを擔いでやつてくる。最前の様に襖の入口から

「まだ御起きにならないのですか」と聲をかけたまゝ、しばらく立つて、首の出ない夜具を見つめて居た。今度も返事がない。細君は入口から二歩ばかり

進んで、箒をとんと突きながら、まだなんてすか、あなたと重ねて返事を承はる。此時主人は既に目が覺めて居る。覺めて居るから、細君の襲撃にそなふる爲め、あらかじめ夜具の中に首諸共立て籠つたのである。首さへ出さなければ、見逃してくれる事もあらうと、詰まらない事を頼みにして寐て居た所、中々許しさうもない。然し第一回の聲は敷居の上で、少くとも一間の間隔があつたから、まづ安心と腹のうちで思つて居ると、とんと突いた箒が何んでも三尺位の距離に迫つて居たには一寸驚いた。のみならず第二の「まだなんてすか、あなた」が距離に於ても音量に於いても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなか迄聞えたから、こいつは駄目だと覺悟をして小さな聲で、うんと返事をした。

「九時迄に入らつしやるのでせう。早くなさらないと間に合いませんよ」

「そんなに言はなくても今起きる」と夜着の袖口から答へたのは奇觀である。妻君はいつでも此手を食つて起きるかと思つて安心してゐると、又寐込

まれつけて居るから、油断は出来ない」と、さあ御起なさい」とせめ立てる。起ると云ふのに、猶起きろと責めるのは氣に食はん者だ。主人の如き我儘者には猶氣に食はん。是に於てか主人は今迄頭から被つて居た夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を二つとも開いて居る。

「何だ騒々しい。起きると云へば起きるのだ」

「起ると仰やつても御起なさらんぢやありませんか」

「誰がいつ、そんな嘘をついた」

「いつてもですわ」

「馬鹿を云へ」

「どつちが馬鹿だか分りやしない」と細君ぶんとして箒を突いて枕元に立つて居る所は勇ましかつた。此時裏の車屋の子供、八つちやんが急に大きな聲をしてワーと泣き出す。八ちやんは主人が怒り出しさへすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒る